

「油山の森を見る知る」

森会は現在アカマツ林、カブトムシの森、竹侵入地で保全作業を行っています。今回は3つの保全地を見ることで油山の森について理解を深め、各森の今を把握し、植生の保全目標に到達するのにどのような活動をすればよいか考えたく勉強会を実施しました。また生物多様性という現代のキーワードについても学びました。

【日時】2008/5/24(土)10時~15時

【内容】フィールドワーク・講義・グループワーク

【講師】須田隆一氏(福岡県保健環境研究所)

1. フィールドワーク

【コース】

竹侵入地→カブトムシの森→アカマツ林

【方法】

先生作成の「生物多様性を考えるためのチェックシート」に各地点で記入しました。このシートで「森を植物の高さという階層で分けその階層ごとに見る」「油山に特徴的な種ヤマボウシ、ホオノキ、コシアブラの有無を確認」「開花結実した植物を確認」の作業を行い、解説を受けました。



2. 講義

(1) 油山の森2つの特徴

福岡県を代表するアカマツ二次林が残っている。またブナ帯にみられる種、ヤマボウシ、ホオノキ、コシアブラ、ハリギリなどが多い。



(2) 森を見る3つの視点

- ① 環境要因：森は土、かかわる生物、気候、などの環境要因に影響されてできる。現代は環境要因のうち人間の影響が大きい。
- ② 空間軸：森は階層構造、つまり高木、低木、草本をもつ存在である。植物は森の中の空間を高さの異なるグループごとに住み分け利用している。油山では最も高い層をタブやシイが占める森が多いが森により各層の種類や量は異なる。そのような存在として森林を理解することは大切である。
- ③ 時間軸：また森は時間とともに変化する。裸地に草がはいるアカマツ林→照葉樹林といった変化する過程を遷移という。管理を加えたとき、放置したとき、森はどう変化していくかという未来を考える視点は必要。

(3) 生物多様性の保全の重要性

生物多様性とは生物の間に見られる変異

性を指す言葉である。それは遺伝子、種、生態系：森林・草原、景観：生態系の複合といったさまざまな段階でみられる。国の施策の目標を定めた第三次生物多様性国家戦略では「つながりと個性」と表現されている。つながりは生物の関係性、進化の長い歴史を含む。生物多様性は大気と水、自然の恵み、文化の多様性を生み、私たちの暮らしを守っている。現代は①開発による種の減少②里地里山の手入れ不足による自然の質の変化③外来種の持込みによる生態系の攪乱④温暖化による種の絶滅、生態系の崩壊という生物多様性にとっても危機の時代である。なお今国会で生物多様性基本法が成立する見通しだが（2008/5/28 参院可決、6/6 公布）現代は法によって生物多様性が守られる必要のある時代である。

(4) 里山の管理と生物多様性

里山の管理には景観、生物多様性、バイオマス生産、レクリエーション、天然林への誘導などの整備目標がありうる。これらの要素のバランス、そして特に生物多様性の考え方は欠かせない。

3. グループワーク

各活動地別にグループワークでこれからの森づくりを考え、発表しました。

お題 1 「〇〇森は今こんな森」

→チェックシートを絵にする

お題 2 「目標にむけて：30年後の森はこんな森」 →絵にする

「そのために08年09年会がすること」

→書き込んだりまとめたり

続けて質疑、講師コメントをうけました。



カブトムシの森 A地区中心に描く

目標：A地区 クヌギの優占する二次林

BC地区コナラの優占する二次林



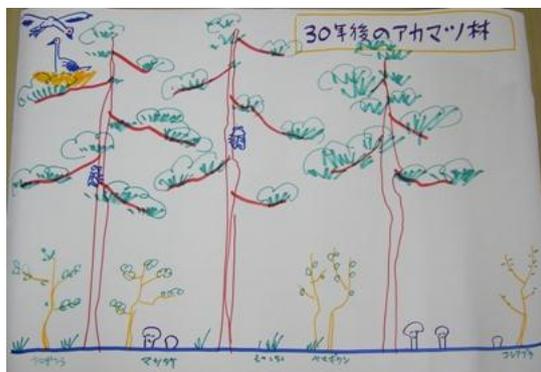
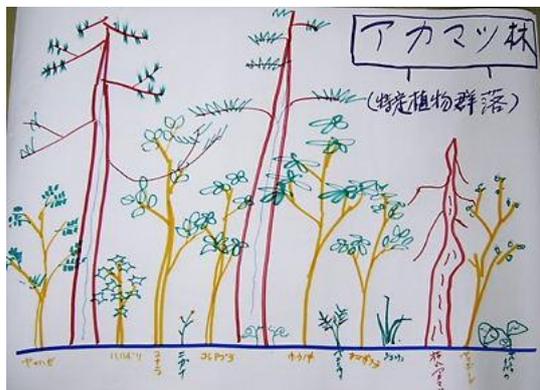
この2年間
クヌギ間伐
タブ、シロダモ
ヒノキ除伐、
下草刈り
山菜を利用

《コメント》クヌギは何年生にするのか？
油山に特徴的な樹種が低木にはいつてきてもよいかもしれない。ここの土壤は栄養・水があり、林床植物より畑雑草等が出る傾向があるのを意識して管理する必要あり。
除く必要のあるものは種子散布前に草を刈

る、必要があれば隣接地からスミレ類などの林床植物を導入するなど管理の方向としてありえるかもしれない。

アカマツ林

目標：アカマツの単林、観察資源としてルート沿いに他の種も残す



《コメント》アカマツ林内には酸性土壌に生育するツツジ科の植物が出やすい。ここではシャシャンボ、ネジキ、ヤマツツジなどみられる。これらアカマツ林に特徴的な種の取扱い、アカマツの更新のためにはどのような管理が必要か考えてはどうだろう。

竹侵入地

目標：竹の侵入を止め二次林を守る



《コメント》元々アカマツ林だったところにマダケが侵入している。南向き斜面であるが南にヒノキがあるので斜面下部は日があまりあたっていない。高木にはアカマツ、マダケ、アラカシ、コナラ、ハゼノキなどがみられる。林床の斜面上部は明るい場所を好むウラジロが多い。ここの竹を切ればその後シダ刈りをしないとアカマツ林としての更新はない。下部は最近竹を切ったとの事で少し明るくなっている。竹を伐採し手を加えないとあつという間に常緑樹が大きくなる。林床にはコナラの芽生えがみられるが大きくしようとするれば周囲の常緑樹を切る等の作業が必要となる。終わりに。森づくりは自分がいなくなった後、100年先まで視野にいれる事業。かつ上位計画との整合性、管理関係者との調整も必要。

科学的知見の元、現地を見ながら森の現況を知り、管理による森の変化の可能性について聞くのは一同とても楽しいときでした。シートは森の見方の具体的な方法を教えてくれました。100年単位の活動である森づくりを続けるための活動の広がり、関係者との連携などについても考えました。森に代わり森のこれまでとこれからを語ってくださった須田先生に感謝申し上げます。

世話役・報告 柴戸慶子

この2年間 下草刈り 落ち葉かき 枯損木の撤去間伐 周辺の保全活動と協力 若者勧誘

この2年間 竹、タケノコの伐採、低木の植林、シダ刈り